S-08

慢性期大動脈解離に対するThoracic endovascular aortic repairの短期成績

目的今回我々は、慢性期の大動脈解離に対して、comformable TAG (CTAG)を主に用いて TEVAR を行った症例の短期成績を検討した。方法大動脈解離に対してTEVARを行った40例の内、発症後3ヶ月以上経過した慢性期に治療を行った27例を対象とし、Retrospectiveに検討した。方法発症後3から12ヶ月で治療を行った早期治療例は4例、13ヶ月以上経過して行ったのは20例、発症日不明が3例であった。使用したDeviceは、CTAG24例、TX2＋Relay1例、Relay＋TX2 aortic extension1例、Relay＋CTAG1例であった。病院死亡は1例であった。1例で脳梗塞を認めた。上記2例以外はすみやかに元の生活に戻っている。術後1から5ヶ月のフォローCTは23例に行われ、1例に逆行性上行解離を認めた。ULPの症例では全例血栓化を得られ、2例ではpositive remodelingが得られた。偽腔開存型の症例のうち、primary entryを閉鎖することで偽腔のcomplete exclusionが得られると想定された症例では、2例で大動脈径の縮小、2例で不変であった。Type Ⅰ endoleakを5例に認めた。結語慢性期大動脈解離に対して主にCTAGを用いてTEVARを行った。ステント端による解離という重大な合併症を認めた。その他の症例では速やかな回復が得られ、低侵襲性は確認できたが、type Ⅰ endoleakを認める症例もあった。